『曹溪大師傳』の成立をめぐって

はじめに

『曹溪大師傳』の資料としての重要性については、いまさら論ずるまでもあるまい。禅宗史の流れが、いわゆる「南宗」へと大きく傾きつつあった七世紀の後半に、六祖慧能の伝記」として出現したそれは、七世紀の末から八世紀の初めにかけ大いに流行を見、多大な影響を禅宗史に与えた。中でも特に注目されるのは、その説の多くが『寶林傳』の中にも特に注目されるのは、その説の多くが『寶林傳』の中で特に注目されるのは、その説の多くが『寶林傳』の中にも特に注目されるのは、その説の多くが『寶林傳』の中にも特に注目されるのは、その説の多くが『寶林傳』の中に伝えられているということがである。そう考えれば、そのいずれにも、たなおかなりの問題が含まれているようにある。

伊吹 敦

このように重要な意義を持つ『曹溪大師傳』であるが、その成立については、必ずしも明確になっているとは言い難い。無論、この問題を先學たちは等閑に付して来たわけではない。中でも、柳田聖山氏と、武勝の印順氏の研究は、自明であって、斯界を益する点が非常に多いと言える。しかしそのいずれにも、たなおかなりの問題が含まれているようにある。

『史実』として広く承認されるに至ったのである。
東洋の思想と宗教
第十五号

は、全く新しい変化であり、……『髪髪塔記』より
も遙かに発展し、次に慧能の曹溪寺の威光を迎えて
も、さらに慧能の曹溪寺を威光を迎えたために、
法性寺の戒壇に於ける慧能の受業筆を説くために、
薬の百二十年の懸記を重ねるのであるが、今やそれ
が先ず、慧能の韶州曹溪山寶林寺に入寺のことを
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々(84)
「曹溪大師塚」の成立をめぐって（伊吹）

5 もし、これが「曹溪大師塚」とより先に成立しているなら、後代に成立した「曹溪大師塚」のほう、とすれば、成立日付が附されるはずがない。二月八日という日付が附されるはずがない。

6 月・年号においてより整合性を持たせたニューディスクリプションが成立している。これは当然、一応この問題は成立日付の上下を示すものである。

7 年号においてより整合性を持つは、成立日付の上下を示すものである。ここに掲げられた論証には問題のものもあれば、それ以外にあるものもある。

8 ここに掲げられた論証には問題のものもあれば、それ以外にあるものもある。この「髏髏塔記」の成立が「曹溪大師塚」の成立であることを示すものではないことは言うまでもある。

9 ここで掲げられた論証には問題のものもある。これは、一応この問題は成立日付の上下を示すものである。

10 ここで一応この問題は成立日付の上下を示すものである。
梁の天監元年壬午（五〇〇）に智藥三蔵が曹溪の伝来 документを編集

【曹溪大師傳】の年代論として一貫に認められているものに掲げておこる。なお、【曹溪大師傳】に於いても、歴史的見解が多く問題点を指摘する。著者が歴史的に関しては全くの素人であることを暴露しているが、ここでは、当面の評価である。慧能の生涯に直接関与なもののみを問題にするに至った。

1 嶤峰元年（六七〇）正月十五日、三十九歳の慧能は、廣州の制旨寺で印宗が「涅槃経」を講じているのに出逢い、風幡問答によって見出され、十七日に剃髪、二月八日に法性寺で受具し、四月八日、初めて法門を開いて、神會と問答を行う。月により、帰化寺に住む。5

2 仏統院（六七〇）正月十五日、三十四歳の慧能は、惠能僧侶の働きによって、正月三日に詔州を出、東山の弘忍のもとに参る。6

3 嶤峰五年（六七五）、三十四歳になった慧能は、曹溪に来る。決して父母を忘れ、三歳で孤児になるが、梁の天監元年壬午（五〇〇）に智藥三蔵が曹溪の伝来を始める。7
触れた印順氏の説である。非常に興味深い説であるから、次に、これについて検討してみよう。

三、印順氏の説について

先ず、氏の説を『中國禪宗史』によって、そのまま紹介しておこう。なお、引用は、最近出版された趙譯に基づくものである。

別傳の説く事跡と年代は以下の通りである。

1. 三十歳の時、曹溪に行ったら
2. その後、三年間、修行した
3. 三十四歳の時（咸亨五年）、五祖に参じた
4. 五年間、僧俗の間に隠れ、鏡地を鍛りあげた
5. 儀鳳元年、三十九歳で、印宗法師に出会い、出家した
6. 先天二年八月に入寂した
7. 三十六年間に亘って、法を説き、衆生濟度を行った

別傳の説く年代は、異常なほど混雑している。儀鳳元年（六七〇）に出家したのならば、先天二年（七〇三）の入滅までは三十六年であるはずで、三十六年間に亘って法を説き、衆生濟度を行った」というのと合わない。

また、儀鳳元年に三十九歳であるれば、咸亨五年には

『曹溪大師傳』の成立をめぐって（伊吹）

三十四歳ではなく、三十七歳であるべきである。曹溪に至った時期についても、三十三歳であったはずで、三十二歳とはならない。咸亨五年（六七四）に法を得てから、儀鳳元年（六七八）に出家するまでには三年に過ぎないから、隠退すること三个月にいう説と矛盾する。別傳の年代は、どうしてこのように混雑しているのであろうか？それには、実は、別傳の説く儀鳳元年に三十歳で出家し、その後、五年間、隠遁していたとするだけで、儀鳳元年（六七〇）に出家したのならば、先天二年（七〇三）の入滅まで三十六年であるはずで、三十六年間に亘って法を説き、衆生濟度を行った。このことは問題である。しかし、実は、儀鳳元年（三九歳）に出家し、その後、五年間、隠遁していたとするのである。しかし、儀鳳元年（六七八）に法を得たとして、別傳の説はあえて、別傳の年代は、完全に矛盾を含まない。整合的なものとなり、それなりに道徳が通っている。即ち、三十七歳の時、曹溪に至る（儀鳳元年、六七八）。

五年に亘って隠遁生活を送る（六七八、六七八四）。
東洋の思想と宗教
第十五号

四十一歳の時、出家する（儀鳳三年（六七八）
の時は、七十三年までが、あたかも、「三
十六年間に互って法を説き、衆生潤度を行った」と時期に
当たることになるのである。

つまり、『曹溪大師傳』が元来主張していた儀鳳三年（六
七八）四十一歲出家説を、全く起源を異にする儀鳳元年（六
七六年）に説くことになる。

確かに、このように解することによって、年齢と隠遁期間
に見られる矛盾を見事に遮り通すことができる。しかし、こ
こにも、なお、次に上げるようないくつかの疑問点が残され
ているように思われる。

1 ここでは、儀鳳三年、四十一歲出家説なるものが想
定されているわけではないが、そうした説を模倣する資料
が外に全く存在しないのは不可解である。

2 もし、五年隠遁説が當初からのものであり、出家
の時期を儀鳳三年から儀鳳元年へと改めたとするならば、
曹溪に来た時や弘忍に参問した時の年齢を減じるだけ
でなく、当然、その時期自体もスライドさせたはずで
はないか。

3 もし、當初の四十一歲出家説を採っていたとするら、
元年出家説とともに書き込まれた、あるいは書き改め
られたと見えるを得なくなるが、その場合、以前は、
あったといわれる内容であったというのだろうか

4 『曹溪大師傳』が、大師在日、受戒開法度人三十六
歳から四十一歳を減ずれば、ちょうど三十六年を得るこ
とができるので、これは、矛盾とすべきではないので
はないか。

5 印順氏の考え方に従えば、隠遁期間や出家後の布教
期間は名目上（いわゆる「数え」）の数え方というに
なるが、一方で、曹溪における修行期間については、
三十三歳で曹溪に来て、三十六歳までの三年間修行
し、その後、三十七歳で弘忍に参じたとするのであ
更に、ここで問題となるのは、このような解決法は、何を印順氏の案出したものだけに限らないということである。即ち、印順氏とは逆に、より本來的な主張は咸亨五年参問説と偽鳳元年出家説の方であって、五年間隠遁説を後方の附記であると見なしても、それ以前の形態として、次のように無矛盾な伝記構成できるのである。

三十三歳の時、曹溪に至る（咸亨元年・六七〇）と、偽鳳二年（六七八）にいった隱遁生活を送る（咸亨五年・六七八）と、咸亨五年・六七八年に帰る（偽鳳元年・六七〇）という伝記構成の成立をめぐって（伊吹）
東洋の思想と教

第十五号

時のことと解しているのであるが、『曹溪大師傳』の敘述

形態から言えば、自然、義風元年に、出家、開法、受戒を行
いった時、四十歳であったと解すべきであり、制覇寺や寶林寺
に移ったのも、同年中に出事であったと見るべきなのであ
る。とすれば、先の、

『能大師跡南。略至曹溪。猶被人尋逐。便於廣州四會懐

集兩縣界避難。經十餘年。在獵師中。大師春秋三十九

という記述も、二十九歳まで、五年間、獵師の間で過ごし
た」という意味で、「義鳳元年に」には、四十歳となったと

解すべきのである。

また、ここでの敘述形態は、三十歳で曹溪に来た慧能が、
忍下での八箇月の修行期間の後に従順を受けてと述べるのである。

さらに、習成五年に三十歳で弘忍に参じたと述べるのはあるが、
これに、三十歳のうちで南帰し、獵師の群れに身を投げたと推測され
る正月には正しく四十歳になるはずである。『曹溪大師傳』の説
明を、義風元年、三十九歳出家の説を説くのと誤解したのでは、
は、少なくとも年齢に関係する、何らの齢呑含んでいないのである。

従って、『曹溪大師傳』が、元来主張していた年代論にお
いては、慧能が義風元年に出家の時の年齢は、生年が正月の話
で、実に、近代になって『曹溪大師傳』が注目されるに至っ
て、正しい生年を前提としてそれを読んだことに始まるの
である。
（男）王小军

（女）王小华

（男）王小明

（女）王小红

（男）王小刚

（女）王小玲

（男）王小强

（女）王小丽

（男）王小勇

（女）王小芳

（男）王小华

（女）王小玲

（男）王小强

（女）王小芳

（男）王小华

（女）王小玲

（男）王小强

（女）王小芳

（男）王小华

（女）王小玲

（男）王小强

（女）王小芳
東洋の思想と宗教 第十五号

このように、髄から、『曹溪大師傳』の特色と見做せるから、恐らくは、本書における創作と見てよい。特に、そこ
に見られる智藥三蔵の懸記、『髄髄髄髄記』のそれに基づ
つきとも、『髄髄髄髄記』が薬能の出家と結びつけていたのを寶
林寺入寺に改めていっていることは、そうした見方を支持するもの
と言えよう。

ところで、上に見たように、少なくとも年齢という観点か
ら見た場合、この伝記には何らの矛盾も含まれないが、問題
は、『曹溪大師傳』では、これらとは別に、以下のような年
号という絶対年代に基づく事績が書き込まれているというこ
とである。

ここで、これらの典籍を調べてみると、以下の資料が
存在し、曹溪がその作成を受けていたという経緯が示される。

曹溪の本籍は、創薬本『壇経』、『法寶記壇経』、『歴代法寶
記』に類似した記載を見ることができる。ただ、これらの資料では、いずれも髄髄を集めて年をつけた年号を建てて
るという点で、このように曹溪が宝林寺を重視せよとす
る姿勢は、先にも言及したように、『曹溪大師傳』の作成であ
るといえよう。なお、創薬本『壇経』、『法寶記壇経』では、髄
髄記を建てた年を先元年（七〇二）としているが、『曹溪大師傳』
は、あきらかに後えてあるものである。

一方、cとdについて、既に述べた通り、伝記は、『歴代法寶
記』により、後大周立、則天即位、敬重佛法、至長寿元年、敕天
下諸州、各置大雲寺。二月二十日、敕使天冠郎中張昌期
往韶州曹溪。請能師。能師師託病不去。則天後至萬歳
通天元年。使往再請能禅師。能禅師既不來。請上代達摩
祖師傳信袈裟。於東室傳信袈裟。有信傳信袈裟。師
來。甚喜悅。於內道場供養。

一則天至景龍元年十一月。又使內侍將軍薛國至曹溪能
師所宣口。師云。將上代信袈裟奉上詔師。師授

と、関聯する記述が見られるのみであるが、これらは、柳田
聖山氏以来、『曹溪大師傳』の創編にかかじて考えられてい
るから、それに従えば、冒頭に触れたように、氏のごとく、
『曹溪大師傳』が『歴代法寶寺記』に依拝したと考えさせる。こ
のことが、松尾経文に引いたこの句文を含む祠文を考

え、『曹溪大師傳』の成立をめぐって（伊吹)

心。叡応鳳翔。遠公之足。不過虎溪。因以此辞。竟不

東洋の思想と宗教

第十五号

この問題は、実は非常に重要である。というのには、上に掲げた絶対年代のうち、「曹溪大師傳」が想定した慧能の生涯と重なるものは、この咸亨五年参詣説と、これと関係する咸亨元年寶林寺入寺説のみである。「曹溪大師傳」に大きな矛盾が生じた理由は、とくにこれを認めたところにあるからである。

ところが、先行する資料で、弘忍への参詣の時期を明示するものは、「六代の傳記」と「歴代法記」のみで、しかも慧能が二十二歳の時（顧象四年、六九五年）としており、「曹溪大師傳」における創唱と考えられる。しかし、そうであれ、それが想定する生涯に合わせればよかったはずであり、なぜそれは矛盾する年号を提出したのか、そこに何らの理由が存在したかと考えざるを得ないのである。

そこで考えられるのは、恐らくそれは、いわゆる「臨終密授説」を前提としているのである。ということである。この説は、既に上記の「六祖能禅師碑銘」と同様に、「臨終」を前提としているのである。この言葉の存在から考えざるを得ないのである。

忍大師相送り。却還東山。更無言説。諸門人驚怪問。法已向南去。今不說。於後自知。忍大師別能大師。怒火三日。重告門人曰。大法已行。吾當逝矣。忍大師遷化。百鳥悲鳴。異香芬馥。日無精光。風雨折樹。

忍大師於衆中尋覓。至碓上見共語。見知眞了性。遂至夜間。密喚來房内。三日三夜共語。了知証如來知見。更無疑掃。既付嘱已。便謂曰。汝得在嶺南。即須急去。眾人知賈。必是害汝。能禅師曰。和上。若爲得去。忍大師謂曰。我自送汝。其夜遂至九江驛。當時得船渡江。大師看過江。當夜卻歸至本山。衆人皆不覆。去後三日。忍大師言曰。徒衆將散。此間山中無佛法。佛法流過南。衆人見大師此語。咸共驚愕不已。兩兩相顧無色。乃相謂曰。嶺南有誰。遂相問。衆中有茲州法如云。此少慧能在此。各遂其趣。
六、『薪髪塔記』の出現

島風堂。如来に心伝心。尊者迦葉。迦葉展轉相傳。至於
達摩。教於東土。代代相傳。至今不絕。師既承有依。
可往京城施化。編集歸依。天人瞻仰。故遺使薛簡簡
師、願早歸至。【曹溪大師傳】

【菩薩大悲轉相傳授。至達摩。居此為初。遞相
伝。於今不絶。】【頓悟無生般若論】

また、【曹溪大師傳】の説く西天二十八祖は、宗密のも
のと一致し、最晩が『血脈譜』で引用するものにも近いが、
恐らくこれは、最晩が『血脈譜』で引用するものに近い、
西天仏祖代代相承傳法記。などに基づくものと思われる。

以上の『曹溪大師傳』の成立過程に関する私見を述べた
四、下掲は、その説がそこで新たに唱えられた新説であることを
示す。

また、『薪髪塔記』の成立を『曹溪大師傳』に沿って置

【法寶記壇經】の五年間隠遁説や『薪髪塔記』の義鳳元年出
家の説が新たに出現したということに気づき、そこに何らか
の理由があっただけを考えなければならぬからである。

ただ、【法寶記壇經】の五年間隠遁説が、他的伝説的要求
と深く関係しているように見えるので、わざわざ隠遁期
間を敦煌本『壇經』の三年から五年に延長したということの
意味を明確にすることは不可能のように思われる。単なる写
誤などに由来する可能性も排除できないのではあるまいか。

しかも、一方、『薪髪塔記』が、それまで全く言及されるこ
のなかった出家の時期を義鳳元年（六年）に決定したこ
とについては、当然、そこに何かの積極的な意味があった
と考えさせるわけではないはずである。

【六祖】弘忍大師を前提とし、慧能の出家の時期をその次年に置くことで、祖師としての権威の喪失を連
続性をもたせただろう、と主張している。つまり、上元二年ま
でが弘忍が『五祖』として君臨した時期であり、上元三年ま
でが弘忍が『六祖』とすなわち君臨した時期であり、上元三

（102）
東洋の思想と宗教

第十五号

「秋葉の思想」と宗教

めに、出家をこの年に設定したのだというのである。

確かに、慧能が印宗に見出されたのが儀鳳元年の「正月」であったというのは、この想定によく合致するように思われ
るし、「無道塔記」の

「今能禪師正月八日抵此。因論風幡。而與宗法師說無
妙道。宗諦演詳。昔所未聞。遂請方船以行」

という記載が「無道法書記」の

「後至南海制止。遇印宗法師論涅槃經。慧能亦在坐
下。時印宗問眾人。汝能見風吹幡干。上頭幡動否。眾
見動。如是問難。非是幡動。本無動不動。法師問說
驚愕。忙然不知所以言。問。居士從何處來。慧能曰。本
來未聞。今亦不聞。法師下高座。迎慧能就房。子細
問。慧能具說東山佛法。及有信信袈裟。印宗法師
見曰。頭面禮足。敬言。何期座下有大菩薩。詣已又頂
禮。請惠能為和上。印宗法師自稱弟子。即與惠州禪師

の要約と考えられることがからすれば、ここに伝えられるよう
な神会派の説が「無道塔記」撰述の前提となっているのであ

ろうから、恐らく、印順氏の説は從うべきものであろう。

ただ、この儀鳳元年出家説は、「無道塔記」に初めて現わ
わたわけでは決してなく、既に、神会の時代には存在してい
たのである。というのは、「六代の傳記」に

「第六代唐朝能禪師。承忍大師後。俗姓盧。先祖范陽人
也。因父官嶺外。便居新州。年二十二。東山禮拜忍大
師。」

と、慧能の弘忍への参問（入法）を二十二歳（儀鳳四年、六
九）の時とし、周知の「六祖能禪師碑銘序」では、先に
引いた「臨終密授」の箇所の直後に

「人。世事多違門。混潤鹿於勞者。如此積十六載。」

と、得法後、十六年間の隱遁を主張しているから、儀鳳四年
末（六九）から上元二年（六七）末までの十六年間が隠
遁期間となり、必然的に、印宗に見出され出家を遂げたの

は、儀鳳元年のこととならざるをえないのである。

史実に基づくと思われる二十二歳の参問と、宗教的要請であ
るところの慧能の『頓悟』に、同じく弘忍入滅の翌年の出世と

(104)
(日本) 818からの効果『篠崎光通報』
東洋思想と宗教

【全唐文】巻六一、

26 咸亨五年（六七四）の得法から三年目は儀鳳二年（六七七）に当たる。儀鳳五年（六七七）に数えれば、儀鳳元年を三

27 曹溪大師傳」では、神龍元年（七〇五）高宗は、慧安と

28 六代の傳記」とは、石井本『神話語録』の末尾に附され

29 六代の傳記」は、前掲『神話語録』の『六祖壇經』の所載

30 同上、九五頁。

31 後に言及するように、『法寶記壇經』は、弘忍の入寂を上元二年（六七五）と

32 咸亨五年（六七四）の得法から三年目は儀鳳二年（六七

33 抽稿『敦煌本壇經』の形成・惠能の原思想と神話派の

34 抽稿『敦煌本壇經』の形成・『金剛経解義』の成立をめぐって』（印

35 咸亨五年（六七四）の得法から三年目は儀鳳二年（六七

36 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

37 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

38 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

39 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

40 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

41 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

42 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

43 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

44 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

45 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

46 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

47 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

48 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

49 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

50 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

51 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

52 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

53 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

54 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

55 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

56 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

57 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

58 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

59 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

60 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

61 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

62 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

63 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

64 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

65 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

66 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

67 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

68 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

69 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

70 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

71 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

72 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

73 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

74 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

75 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

76 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

77 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

78 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

79 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

80 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

81 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

82 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

83 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

84 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

85 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

86 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

87 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

88 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

89 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

90 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

91 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

92 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

93 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

94 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

95 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

96 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

97 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

98 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

99 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

100 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

101 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

102 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

103 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

104 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

105 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

106 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

107 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇

108 新本『六祖壇經』の所載主板との関連『蘊権壇